
恋姫無双～龍の如く～

bigboos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜龍の如く〜

【Nコード】

N5641Y

【作者名】

bigboos

【あらすじ】

ある日暴走車に引かれて死んでしまった鬼龍和人、目の前に爺さんが立っていて二つの選択を言われた、ここに残るか・異世界に行つてやり直すかと言われた。この話はぬらりひよんの孫×デビルメイクライ×恋姫無双・などまあ、チートを使っています

初めて書くので恋姫無双などに関して「知ったかぶってんじゃねーよ」とか思う人がいると思いますが許して下さい

第一幕 俺は・・・（前書き）

どうもbigboosです初めまして、いやゝ書くのは初めてなので応援よろしく
お願いします

第一幕
俺は・

ある日、いつもどおりに過ごしていた俺はその日

聖フランチェス科大学から家に帰ろうとしていたところに

突然、暴走車が突っ込んで来てかわせず死んでしまった……

はじめる。

「ようやく目を覚ましたか・・まったく」

あ
ん
た
は
・
・

「ワシか？ワシはただの爺さんじゃよ」

そうか・・・で爺さんこっちはどこなんだ

「ここか？ここはあの世じゃ」

え・・・・ええええええええええ？

うそだろ？なんで俺死んだんだよ？

「お主暴走車に引かれてしんだじやろ．．」

うーんあんまり記憶にない

「本当ならお主はあそこで死ぬはずはなかった、じゃがお主が死んだ時

本来なら輪廻の輪に戻るはずだったんじゃが、なぜか輪廻の輪から外れてしまったんじゃ（笑）」

なんでアンタ笑ってんだよ？（怒）

「まあそれはとにかく、この後お主はどうしたいんじゃ？このままここにいますか？

それとも、異世界に行ってやり直すか？お主の好きな方を選ぶんじや。」

え・・・それはここに残るのはさすがに嫌だけど、向こうの異世界に行ったら赤ん坊からやり直しなのか？ていうか異世界ってどんな世界なんだ？それによって決まるけど・・・

「ん？その世界は・・・ま行っただけのお楽しみじゃ」

うーん、どうしよう・・・

俺なりに考えたすえ、結局ここにいるのは暇だと思ったので・・・

爺さん、俺異世界に行く

「む、そうかではさっそく・・・」

ちよつとまったー？

「うお？なんじゃいきなり、大声出しおって？」

赤ん坊からって言うのはちょっと氣にくわねえな、せめて20才にしてくれ頼む？

あと何個か願いを叶えて欲しんだ

「わがままな奴じゃな・・・いいじやろ、で他になにを叶えてほしいじゃ？」

第一幕 俺は・・・（後書き）

途中で終わってしまいました、スイマセン次回は主人公がいろいろ
いると

チートのような事を言います

アドバイス宜しくお願いします

第二幕 どうしようこれから

まず一つ目はデビルメイクライ3のパージルと、服装と髪型意外は全て同じで、

二つ目は外見だけどぬらりひよんの孫に出てくるので、まあなんでもいいです

四つ目は年齢は二十歳にしてくれ、赤ん坊

の頃からって言うのはあまりにも嫌だから。五つ目は、女性に多少モデル

ぐらいにしてくれ、最後はどんな傷でも治せる薬をくれ

「うーむ、まあよいじゃろ一つ目と四つ目は叶えてやろつ。二つ目じゃが外見は

なんでも良いと言ったが、本当に何でもいいんじゃないな?」

ああ・・・いいけど

「うむ、分かったあとで後悔するんじゃないぞ、よいな? 五つ目は十人中七人が振りかえるぐらいでよかるつ」

まあ・・・いいけど

「最後の願いじゃが、この薬を持って行くがよいどんな傷でも治せるものじゃ。

じゃが、悪しき者には使うでないぞ、いいな?」

分かった

「それでは早速異世界に送るからの、元気でのう・・・」

「おつと忘れる事じゃったお主名はなんと申す」

俺の名前は鬼龍和人、向こうの世界では結構優しかったんだぜ？

「ふむ、鬼龍和人か・・・良い名じゃ異世界でも優しい心を持つのじやぞ。」

そして、平和な世の中にするんじゃ」

そして俺は光に包まれて目の前が真っ黒になった

う・・・うーんここは・・・

目を覚ますと川に近くにいた、「ここが三国の世界か・・・

ん？何だ手紙か『鬼龍よお主がこの紙を見ているとゆうことは無事着いたようじゃな

お主がいる世界は三国の世界じゃが、ただの三国世界ではない、恋姫無双の世界じゃこの世界は

・・・とゆう感じじゃ、あと外見じゃがなんでも良いと言ったので淡島にしていたからのじゃあの』

手紙に書かれたことを理解し、立ちあがった・・・さてこれからどうしよう。

第二幕 どうしようこれから（後書き）

どうも、寒いです。今回、これからのところで終わってしまってます
イマセン

次回、鬼龍はとりあえず人に会うために歩いていると、山賊が一人
の女子を囲んでいた。鬼龍は助けようとする・・

第三幕 黒髪の女ゝ前編

俺はとりあえず人に会うために道を歩いていた

「ん？あれは・・・」

よく見ると道の端っこに三人の男とその前に一人の少女がおびえていた

『へへへ、金目の者を渡しなへへへ』

『そうだぜ速く渡しな』

『は、早くわ、渡しんだな』

なんだあいつら、人の金を奪うのか、と言う事は山賊か・・
とりあえず助けるか

「おーいその人」

『ああ？なんだガキ』

ガキとは失礼な、二十歳だぞ

「その娘おびえてんだろ、離してしてやれよ」

『なんだと、部外者はどっか行けよ』

そう言いながら山賊の一人が、剣を抜いて俺にむけた

「おい、もう一度言うぞ、その娘を離してやれ」

俺はそう言いながら閻魔刀を鞘に入れたまま抜いた

『お・・なんだやるつてのか後悔すんじゃないぞ？』

ほかの二人も剣を抜いて構えた

「おい、お前らこそ後悔すんなよ？」

『し、死ぬんだな』

デブが怖そうに突っ込んでくる

はあゝめんどくせ、俺はそう思いながら閻魔刀でデブのみぞおちを叩いた

『ぐふう？』

『あ、兄貴？デブがやられた？』

『な、なんだと・・デブがやられた』

おいおい、味方のお前らまでデブって言うなよ

『つ・・？おい次お前がいけ？』

『いやっすよゝ兄貴が行けばいいじゃないですか？』

なんか、二人でもめあっているな、今のうちに・・

『ん？』

『なんだ？』

地面を蹴って、刹那の如く目にも止まらぬ速さで二人のみぞおちに、閻魔刀を入れた

『ぐふう？』

『あべしい？』

そのまま二人は気絶した、
「ふう〜あ．．大丈夫か？」

少女の所に駆け寄り声をかけると、
『あ．．ありがとう．．』

おびえた様子でこっちを見ている。山賊じゃないですよ〜

「ああ心配して、俺は山賊じゃない」

『ほ．．本当？』

「ああ、嘘はつかねえさ」

『．．．．．』

ああ〜警戒してるねえ、ままいいかおつとそれより

「あのさ、ここ近くに村とかないか？」

『あるよ、ここをまっすぐ行ったところに．．』

「そっか、ありがとう．．あ君はどこに行くの？なんなら送るけど．．」

俺がそう言つと、『私は、この先にある村に住んでる．．』
ん？じゃあ俺と向かう所か

「じゃその村まで一緒に行こうか」

『え、でも．．』

「いいって、また山賊が出たら危ないだろ？」

『うん．．』

お、村が見えたぞ。

あれから数分かかってようやく村の少し手前まで来た。

よし、あと少しで・・・と思った瞬間、横からいきなり一人の女が俺に向かって槍のようなものを

刺してきた。

「うお？あぶねえ？」

少女を抱えて、少し後ろに下がる

「誰だ？」

閻魔刀を構えて俺がそう言うと、黒くて長い髪のが、

「わが名は関羽？字は雲長？その娘を離せ山賊め？」

と体にまとっていた布を撮り名のった

こいつが、関羽か・・・、男だと思ってたけど、そお言えば爺さんの手紙に

恋姫無双とか書いてあったけど、って言うか俺は山賊じゃねえー！

第三幕 黒髪の女〜前編〜（後書き）

どうも、bigboosです。今回やっと武将がでてきました
この後も楽しくしていくのでヨロシク

次回は主人公の設定を書こうとおもいます

コメント、感想お願いします

遅くなりながら、オリ主設定

主人公

鬼龍和人（二十歳）

身長：178cm

体重：75kg

体格：無駄のない体。（おもに筋肉）

容姿：心は優しい。外見はぬら孫の淡島
意外に平和主義

聖フランチェスコ学園に通っていた普通の高校生

普段は、テニスなど体を動かす事をしている

怒らせるとたとえ妖怪など、一瞬にして震えあがる

外見が淡島なので夜になると、女の姿になる。

昼は男の姿

三国志はときどきにしか、見てないのであまり詳しくない

北郷一刀とは友人

武器

閻魔刀

デビル3に出てくるバール愛用の閻属性の日本刀。「人と魔を分かつ」とも、「閻を切り裂き食らい尽くす」とも言われている刀、鬼龍が使うとバールを超ええる力を出す

ベオウルフ

攻撃力があり、攻撃速度も速い。

鬼龍の場合これを使うと拳が痛い

フォースエッジ

こちらは、デビル1に出てくる。ダンテが装備しており、アミュレットがそろつと魔剣スパードになる

鬼龍はこれを危ないときや助けるときにつかう

幻影剣

魔力により出来た剣。

自分の周りや相手の周りに、設置できる。その場から直接相手に放つことができる

最大でも五人まで同時に攻撃出来る

ダークスレイヤー

敵の前方・上方・下方（地上だと後方）へ瞬時に移動し一気に間合いを詰める事ができる。移動・回避にも役立つ

鬼神の“鬼憑” 完全なる父性 “伊弉諾”^{イザナギ}」

鬼龍が男の姿の状態で閻魔刀を装備している時に発動できる
どんな相手でも一刀両断できる、そのためには「畏」を溜めて一気に放出する

この技はぬら孫の淡島ので、魅を放ち鬼の如く恐怖に落とし入れる

天女の“鬼憑” 完全なる母性 “伊弉冉”^{イザナミ}」

鬼龍が女の姿の状態で発動できる、武器は必要なく混乱している味方に対して使用する
使用すると少し疲れる

いくさおとめえんぶ
戦乙女演武

乙女のごとく艶やかな舞で翻弄する。

これも、女の姿でしかできない。

魔人化

武器はどれでもよい、男の姿でしかできない

覚醒・魔剣士スパード

鬼龍が怒りや悲しみが頂点に達した時だけに覚醒する

武器は魔剣スパード、姿は攻撃をする時だけスパードの姿になる。

常に、周りには幻影剣が配置しており、攻撃してくる敵には容赦せず、降伏する敵には

みぞおちを入れる。

背後にはイザナギの姿が見える。（なぜか・・）

この状態の時はどんな攻撃も全く効かない。（たとえば、マグマでも、レーザーでも）

フォースの力

あらゆるものを、手を触れずに動かせたりできる

遅くなりながら、オリ主設定（後書き）

オリ主の設定は話が進むたびにたまに変わります
まあ・・あまり変わらないとおもいますが。
鬼龍は、もう最強になってると思います

次回鬼龍はいきなり出てきた関羽と戦う事に・・・

第五幕 黒髪の女と後編

愛紗

「愛紗、村はまだなのか？ 鈴々は疲れたのだ」

「私も疲れちゃったよ」

「桃香様しつかりしてください、鈴々もしつかりしろ？」

「うむ、私も少し疲れてしまった」

二人ともみつともない、おまけに星まで・・・

「朱里、雛里大丈夫か？」

「はい、私は大丈夫です」

「は、はい大丈夫でしゅ、はわわわ・・・噛んじゃった・・・」

二人は大丈夫のようだな

それから少しして、道ばたに三人の男が倒れていた。

「桃香様？ 人が倒れています？」

「え？ いつてみよう？」

急いで倒れている三人の男もとへ急ぐ

「大丈夫か？ しつかりしろ？」

「大丈夫ですか？」

『う・・・ひい？ ち、近寄るな？』

何を言っているのだこの男たちは

「落ちつけ何があつたんだ？」

星がそう聞くと

『さ、山賊が、おらの娘をさらつたんだ？』

「何だと？ それで山賊はどっちに行つたんだ」

星がきくと、『た、確か向こうの村の方に行った気がする・・・』

「村か、分かったあなたの娘を助け出そう」

『本当か？ありがとう』

「おい、愛紗その山賊の特徴をきいとかないでいいのか？」星が言う

「あ・・・そうだった、山賊はどんな姿だ？」

『腰に黒い刀をしていて、あと・・・すまん忘れてしまった』

黒い刀か・・・この国の者じゃないそうだな

「よし、星、鈴々助けにいくぞ？」

「鈴々はつかれたのだ」

「私も疲れてしまった、少し休ませてくれ」

「まったく、じゃ二人は桃香様を守りながら後からきてくれ」

そう言い残して私は一人、腰に黒い刀をさしている山賊を探しだした

はあ、はあ、どこにいる、あれからずいぶんと絶つが黒い刀を持っている

山賊はどこにもいない。

「向こうの方を探してみるか・・・」

向こうに行く途中話し声が聞こえた。

「ん？あそこにいるのは・・・」

一人の小さな少女と腰に黒い刀をさしている男がいた

「あいつか」

そのまま山賊に向かって青龍円月刀を向けた。

「うお？あぶねえ？」

相手は少女を抱えて後ろに下がった。

「誰だ？」

男が見たこともない剣を向けて行った

「わが名は関羽字は雲長？その娘を離せ、山賊め？」

鬼龍

なんだこの女、いきなり人に槍のようなものを突き付けて、礼儀をしらねえのか

「おい、いきなり襲ってきやがって、お前も山賊か？」

「なにを言うか、お前こそ山賊だろう？」

「・・・？、なに言ってるんだよ山賊なわけねえだろ」

そう俺が言つと、「うるさい、山賊め？覚悟ー」

ブン？ ガキンン？

俺はすかさずフォースエッジに武器を変え関羽の攻撃を防ぐ

「くう・・・？何すんだよ？話をきけよ。」

「問答無用？はあああああ？」

く・・・このままじゃ、ん？そくだ・・・

・ 何だこの男、ただの山賊だと思っていたが違う、この男はまるで・・・

よし、いまだ。

ブン？ 残像を残しながら相手の目の前に移動する

「え・・・」

そのまま、相手の足をはらった

「きゃ？」

そのまま地面に倒れこみフォースエッジ突き刺す。

「これで「まってください？」なんだ次は」

そこには五人の女が後ろに立っていた

なんだこいつら・・・

第五幕 黒髪の女〜後編〜（後書き）

どうも、やっぱり戦闘のところは書くのが難しいです。
でもまあがんばります

次回、鬼龍は誤解をやっと聞き入れてもらい、五人の女の子達と村に
目指す、しかしそこには鬼龍が倒した山賊三人組が待っていた。

第六幕 願い（前書き）

今気がついたけど第一幕以外は全部（改）になっていた（笑）
その理由は、すべて途中で作成を終えたのでまた途中から、することになったんです

第六幕 願い

鬼龍

「で、その男三人達に山賊が娘をさらったって聞いて俺を襲ったのか
「申し訳ない」

頭を下げて謝る関羽

「むやみに人の言う事をきくな」

「「「「「本当に申し訳ない（ございません？）（のだ・・・）」」」」」

他の五人も一緒に謝っていた

「あ、いやそこまでしなくてもいいから、頭上げて」

「え、あはい」

「うむ」

「お兄ちゃんは優しいのだ」

「優しい方ですね」

「本当だね」

「や、優しい人でしゅ、噛んじゃった・・・」

そこまで言わなくても・・・と、そうだこの子をむらに連れて行かないと

「じゃあ、この子を村におくるから、なんならあんた達も一緒に来るか？」

「え、どうして？」

「いや別に、あんたらどこに向かってんだ？」

「あ、この先にある村に行こうとしていたんです」

村か、じゃあ俺が行くところか・・・

「じゃあ行くか？一緒に」

「え・・・でも」

何か困りごとでもあったか

「あ、いやいいんだ。無理に行かなくても」

「あの・・・？」

ん、何のようだ？

「付いて言ってもいいですか？」

「も、桃香様??」

「だって、優しそうな人なんだもん」

「ですが・・・？」

そうだぞ、案外平和主義なんだぞ、俺は

「ああ、いいけどその前に一つ質問していいか？」

「はい、何ですか？」

前から聞こうと思ってたけど、たしか別の名前でよんでたな

「あのさ、なんで関羽のことを、愛紗って呼んでたんだ？」

ブン? 「今の言葉を取り消せ？」

また、関羽が青龍円月刀を俺に向けて振ってきた

「あぶねえ? なにすんだよ? 俺はただ・・・」

「うるさい? 黙れ?」

ブン? ブン?

「愛紗ちゃんダメだよ? ちゃんと質問に答えないと」

「ですが、こいつは私の真名をよんだのですぞ?」

「真名? なんだそれ?」

真名と言った瞬間関羽が睨んできた。本当に知らないんだって?

「私が説明しますね」

“真名”は、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く“真名”で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たるのです」

なるほど、それで関羽が怒ってたのか。

「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね、私は劉備、字は玄德、真名は桃香だよ　よろしくね」

「桃香様??なぜ真名を教えるのですか??」

たしかに、別に教えなくてもいいのに・・・

「だって教えてもいいと思っただもん」

「だからといって・・・」

「皆はいいよね　」

「私は・・・では一つお願いがある」

関羽の後ろにいた薄青色のした髪の女が言ってきた、なんだねがいつて?

「私と一度手合わせを願いたい、もしそなたが勝ったら真名を教えよう」

「え、だめだよそんなことしたら」

劉備が言つと、「鈴々もそれがいいのだ?」

「私もそれがいい、覚悟しろよ・・・」

関羽と鈴々とか名乗る奴に、薄青い髪をした女が言ってきた

「ああ、いいぜかかってこいよ、三人まとめて相手してやる」

「では、いざ?」

関羽の掛け声と同時に三人が走ってきた

後悔すんなよ?

第六幕 願い（後書き）

どうも、やっと出来ました。
いやあ、長かったです

第七幕 ようやく・・・

「ヤアアアア？」「ブン？サツ？

おつ、鈴々とかいう奴なかなかやるな、

「だが、まだまだあ？」

ベオウルフの籠手を装備して、鈴々にストレートを放った。

「うわああああ？」そのまま後ろに倒れこんだたん、関羽が突っ込んだ

「ハアアア？せい？」

ギイン？「痛って？」ベオウルフで関羽の攻撃を防いだけど、少し痛い。

「この？」関羽にも、ストレートを放った。

「きゃあ？」関羽はそのまま、後ろに倒れた。

「おいおい、まだ出来るだ「すきあり？」？」

くそ？よけきれない？・・・よし

「せいやあああ？」ス力、え・・・

「こつちだ。」

危なかった、もう一人いるのを忘れてた、そう思いながら薄青色の髪を持つ

相手の後ろに回り込んで、閻魔刀を突き付けた。

「くっ・・・？私の負けだ・・・」

ふうーやっと終わった、さすがに疲れたな。

「三人とも大丈夫？」

劉備が三人達に近寄り声をかける。

「あの、大丈夫ですか」

横に二人のかわいらしい少女が近寄ってきて、こっちを見ながら聞いてきた。

「え、ああ大丈夫だ、ありがとな」

二人の頭をなでてやった

「／／／い、いえ／／／」

なぜか二人の顔が赤くなった、熱でもあんのか？

「おい、約束」

そう言つと薄青色の髪の子が立ち上がって、こっちに歩いてくる。
なんだ、殴る気か？

「私の名は超雲、字は子龍、真名は星だ」

超雲か、たしか槍の使い手だった気がする、真名は星か。

次に二人の少女がこちらを見て

「私の名前は諸葛亮、字は孔明です、真名は朱里です」

「はわわわ、私は鳳統、字は士元、真名は離里でしゅ、はわわわ囃んじやった」

小さい帽子の方が、諸葛亮で真名が朱里か、で青い帽子の方が鳳統で真名が離里か。

この二人は知ってるぞ、天才軍師だったな（確か・・・）

「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ」真名は鈴々なのだ」

張飛か、確か酒が大の好きって書いてたな真名は鈴々か、自分で言ってたけど。

そして、最後は関羽・・・だと思ったが気絶しているらしい、そんなに力いれたっけ？

「おい、大丈夫か？」

「うん」

反応がない、ただの屍のようだ、とそんなことより

「とりあえず関羽を村に運ぼう、そうだあんた達のことを何て呼べ

「ばいいんだ？」

劉備から「真名は愛紗ちゃん以外はみんな、あなたに教えたから真名でよんでいいよ」

「いいのか？」

「うむ、いいぞ」超雲がそう言う

「鈴々もいいのだ」

「はい、いいですよ」

「はい、いいでしゅはわわ、また噛んじゃった」

「みんながそう言うなら、あ俺の名前は・・・ま関羽が目覚めてからおしえるよ」

今教えたら混乱するからな、夜も近いし姿の事もあるからな。

「じゃ、星運ぶの手伝ってくれ、もうすぐ夜になるからな」

「うむ、わかった」

こうして俺は、桃香、鈴々、星、関羽（真名はなんか分からん）、朱里、離里達の真名をさずかった。

さて、ここに来た事情の事を村で話すとするか、ふあああ眠い。

第七幕 ようやく・・・（後書き）

どうも、前の文章が読みにくいと思ったひとがいるかもしれません
スイマセン、今回は読みやすくなっているとおもいます（たぶん）
次回鬼龍は村に着き、宿で事情をはなした、そして・・・

第八幕 真名く前編く

「村についたのだく」

あれから星に関羽を持ってもらって、村に着いた。

「ふうくやつと着きましたね」

「もう、足がガクガクだよ」

「大丈夫か？、星」

「ええ、大丈夫です、その子はどうするのです？」

あ、そうだったこの子の家はどこだろう

「自分の家は分かる？」

「う、うん分かるよ」

「じゃあ、教えてくれるか？」

そして、少女の家に着いた

「ありがとうございます、ほらちゃんとお礼を言って」

「あ、ありがとうございます」

「いや、いいんだ次から気をつけろよ」

よし、これでひとまずはいいい、「チョンチョン」誰かが背中を突っついてきた

誰だ？

「あのく一つ聞いてもいいですか？」そこには朱里と離里がいた。

「ん？どうした？」聞くと、

「今日、どこで休むんですか？」

ん？休む・・・どこで・・・考えた、そして言った。

「分かん（キツパリ）」

二人共目をキョトンとしている、いやホントどうしよ？

「あのゝ、」

「ん？はい」

「もしよければ、私たちの家で良ければ、休まれますか？」

ほ、ホントか？これはラッキー？

「いいんですか」

桃香が嬉しそうに聞いている。

「ええ、いいですよ」

「ありがとうございます、あと良ければこの人も良いですか？」

星が関羽を指差して言う、「ええ、いいですよ」

「「「「「じゃあ失礼します（のだ）」「「「「「」

おおおゝつまそうな飯だ、「パク」

鈴々が先につまみ食いをした、何をする？（ムスカのように）

「鈴々ちゃん、つまみ食いはいけませんよ」朱里が鈴々を叱った
「だって、鈴々はお腹がすいたのだゝ？まだ食べちゃいけないのか

」？」

「もう少し我慢しろ、私だって我慢してるんだ」と星が言う

「私もお腹がペコペコなんです」桃香も鈴々と同じ様な事を言う

たしかに俺も腹がへったな

「おまたせしました、えんりょうなく食べて下さい」

「あ、どうもじゃ」「」「」「いただきま〜す？」「」「って早？」

さすがに俺と星はすぐには食べなかった、だってまだ名前聞いてねえもん

「あの〜お名前は・・・」

あ、向こうから聞いて来てくれたありがたい。

「私は超雲、字は子龍、真名は星だ、よろしく」

「あ、私は劉備、字は玄德、真名は桃香だよ」

「はわわわ、私は鳳統、字は士元です、真名は離里です」

今回は噛まなかったな。

「鈴々は、張飛、字は翼徳なのだ〜真名は鈴々なのだ〜」

「私は諸葛亮、字は孔明です、真名は朱里です、宜しく願いします」

「星さんに、桃香さん、鈴々ちゃん、離里ちゃん、朱里ちゃんですね、私は南葉といいます」

この子は凜と言います」

「よろしくね、凜ちゃん」

「／／／は、はい／／／」ちょっと照れくさそうにしながら言った。

「で、あなたのお名前は？」

「あ、俺は・・・後で皆が集まった時に言います」

それから数分後、奥の部屋から関羽が顔を出した、

「なにやら騒がしいですね」

「あ、愛紗ちゃんやっと起きたよ」

もう腹いっぱいだ、ゲップ

「いっぱい食べたのだよ」

「うむ、これ以上は食べれないな」

「おいしかったです」

「おいしかったですね」

「お、関羽やっと起きたか」

「き、貴様、なにをしている？」

「いや、何って飯を食ってただけだけど、なあ桃香」

「はい 愛紗ちゃんもどうぞ、おいしですよ」

「え、いや私はあまりお腹は・・・」

ギュルルルル~~~~~

「ノノノノこ、これは違います？そ、その・・・ノノノノ」

「えんりょうしなくてもいいんですよ、さどつぞ」

「じゃあ、お言葉に甘えて、いただきます」

パクパク、もぐもぐ、凄い勢いで食べてる

「お名前は？」

「わ、私は関羽、字は雲長、真名は愛紗です」

「愛紗さんね私は南葉、この子は凛と言います、娘の事は有難うございました」

「い、いえ」

「ところであなたお名前・・・」

「あ、皆いるな、じゃあ俺は鬼龍、字は和人、真名はない、あと俺は異世界から来たんだ」

この後、事情を説明した。

第八幕 真名ゝ前編ゝ（後書き）

書いてたら文が多くなったので、前半と後半に分けます

「?」

「か、体がひかってるよう？」

「ど、どうしたのだ？」

「なんだ……？」

「こわいですう」

「はわわわわ」

次の瞬間、光が消えて男だった俺が姿が女になっていた、そうこれが妖怪・淡島の特徴

淡島は昼になると男、夜になると女になる妖怪。

「き、鬼龍さん……？」

「どうして、女になっちゃったの？」

「信じられん……」

まあ、無理もない、姿の事を言っていないからな

「実は俺、昼は男、夜は女になる妖怪なんだ、ただし全部が妖怪じゃない」

何て言うか半妖半人なのかな、この場合」

「半妖半人？何ですかそれ？」朱里が不思議そうに聞いてくる

「え、ああそれは……」俺が答えようとする

「半妖半人っていうのは、半分が妖怪で半分が人間という事だ」星が話してくれた

なんで知ってたんだ？

「ああなるほど」ポンと手をたたいた。

「じゃあ、お風呂はどうするんですか？」桃香が聞いてきた

「え、うーん一応俺は男だったからな、男湯だろ」

「胸がおっきいのだ？」

おいおい、そこに目をやるか？普通、でもぬらりひょんに、出てくる淡島は

確かに胸が、おっとこれ以上言えねえわ。

「／／／こ、こら？鈴々、そんな事をきくな？／／／」愛紗が顔を赤らめながら鈴々を叱った

「愛紗よりも、大きいのだ？」

「余計な御世話だ？」愛紗が大声で怒鳴った、ちよつとは声の音量下げろよ、夜だぞ今。

「そもそも何の妖怪なんですか？」離里が聞いてきた。

「淡島っていう妖怪なんだけど」

「じゃあ、真名は淡島でいいんじゃないのか？」星が言ってきた

「そうだな、それでいつか、桃香達もそれでいいか？」

「いいんじゃないかな」

「それでいいと思うぞ」

「そ、それでいいのだ」なぜ泣きながら言っている鈴々よ

「私もそれがいいと思います」

「え、はわわわ、いいと思います」

皆が嬉しそうに言った、鈴々以外は。

「じゃあ今日から俺の真名は淡島だな、よろしく」

「「「「「「よろしく頼む（なのだ」（おねがいします）」」」」」

「」

この後俺は風呂に入り、早く寝た・・・

第九幕 真名〱後編〱（後書き）

どうも、今回は主人公の真名を決める話でしたけどいかがでしたでしょうか

途中、少し色気のようなものを入れましたが、まあ、どうでもいいですねはい。

第十幕 旅立ち・・・のはずが

「う~~~~ん、はあ」

いい天気だ、何かいい事がありそうだな

「淡島さん、おはようございます」

「ああ、おはよう」

そこには朱里がいた。

「昨日は大変でしたね」

「まあな、でもあれで全部分かったからいいんじゃないのか？」

「そうですね」

朱里が小さく笑う。

「む、何だもう起きてたのか」

星が少し眠たそうにしながら、起きてきた。

「おう、おはよう」

「そうだ、いつ聞こうか思ってたんだが」

「ん？」

「これからお前の事をどう呼べばいいんだ？」

「どうって・・・鬼龍でもいいし真名で呼んでもいいけど」

「うむそうか、ではこれから和人と呼ぼう」

下の名前でか、まあ呼びやすいいいんじゃないね。

それからして、桃香達が起きてきた、桃香はなんだかボケているのか何回か柱に頭をぶつけていた。

「ふう〜良く食べた」

「お口あつてよかった」

「有難うございます、何から何まで・・・」

南葉さんが俺たちが泊る所がなかったとき、家に泊めてもらったその南葉さんの娘が山賊達に襲われた所を、俺が助けてやった。

「このあとはどうするの？」

南葉さんの娘凜が聞いてきた

「この後は、南に行ってみたいと思います」

桃香が行く場所を示した。

「そうですね、またここを通った時はいつでもきてくださいね」

「有難うございます」

あれから少しして、ここから南に旅立つので食料などを調達してから出発することになった。

「よし、これだけでいいな」

「ああ、そうだな」

「少し荷物が多くなったのだ」

俺と愛紗、鈴々で食料の調達に来ていた、桃香と星、離里は別の買い物をしている。

「じゃあ、帰るか」

「そうだな、長くいては時間がないからな」

「そうですね」

帰ろうとした時、向こうから声が聞こえてきた。
なんだ？

「スマン、先に帰っててくれ」

「どうしたのだ？ なにかあるのか？」

「いや、ちよつとな・・・」

荷物を愛紗達に任せて、声がする方に行った。

そこには、俺が最初に会った山賊達が店を荒していた。

「やめてください？なにをするんですか？」

「へへへへ、じゃあ金を出しなそれで許してやる」

「そうだぞ、兄貴の言うとうりにしろ？」

「は、早くするんだな」

あいつら・・・前のやつで懲りてなかったのか

「おい、何やってんだ」

「ああ、なんだ・・・ってお前は？この前の？」

「おい、お前らこの前で懲りたんじゃねえのか？」

「へ、あんなんでへこたれるかよ」

「今回は許す気ねえからな・・・」

閻魔刀を一瞬で抜き、小柄な奴を斬った。

「ぎゃ……?」

「な、ないしやる?」

「黙れ……」

さらにそのままエアトリックで兄貴の近くに行き、縦、横に切り捨てた。

「ぐあ……?」

「残るはお前か……」

「ひい?ゆ、許してくれだな?」

「だめだ、お前らは人を傷つけた」

デブの男を睨みつけ、体中に畏をあふれ出し

「鬼神の“鬼憑”完全なる父性 伊弉諾^{イザナギ}……」
そして……

「あ、やっと帰ってきたのだ」

「遅かったではないかなにをしていたんだ?」

「いや、何でもなかったお仕置きをしていただけだ」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

第十幕 旅立ち・・・のはずが（後書き）

どうも、今回も長くなってしまいました。
さて、やっと畏、戦いが出てきました
これから宜しく願います

第十一幕 旅

「では、これで」

「気お付けてくださいね」

「はい」

桃香があいさつを済ませ、村を出ようした

「あの？」

「ん？凜ちゃん何か用かな？」

何だろう？俺はそう思いながら振りかえた。

「これ・・・私が大事にしてたお守り、鬼龍さんにあげます」

「いいのか？大事にしてたんだろう？」

「いいんです、山賊から私を助けてくれたお礼です」

とても大事にしていたんだろうな、握ったあとが着いている。

「じゃな、元気だな」

そう言い残すと、俺たちは村を出て南に向かった。

「鈴々はお腹がすいたのだ」

「そうだな、もう少ししたら飯にしよう」

「そうですね、村を出てから歩きっぱなしですしね」

朱里と鈴々が腹をすかしていた。

「桃香達は大丈夫か？」

一応桃香と愛紗、星、離里にも聞いてみよう。

「私もお腹すいちゃった」

「そうだな、すこし早いが昼にしよう」

「うむ、賛成だ」

「そうですね」

全人賛成のようだ、じゃ飯にするか。

「どこでたべるのだ？」

鈴々が聞いてくる

「そうだな・・・お、あの木の陰で休もう」

そして、木の陰で昼飯を食べていた

「うまいな」

「そうですね」

「鈴々、よく噛んでから次を食べろよ」

「わかってるのだ」

「お、おいしいです」

「確かに」

皆つまそつにして食べている

「よし、そろそろ行くか」

昼を食べて少しした後、俺が言い張った。

歩き始めて数十分、桃香が話してきた。

「鬼龍さん、すこし寄って行きたい所があるんですけど・・・」

「ん、寄って行きたい所？どこにあるんだ？」

「このまままっすぐ行つた所にあるんですけど・・・」

「まあ、別にかまわないが、どうして？」

「え、それは・・・」

何かいいたくない事でもあるのか？まあいい

「おいしい桃香が寄りたい所があるらしいから、そこで宿を探してみよう」

「え、まあ構わんが、なぜ？」星が聞いてくる

「桃香が寄りたいんだとよ」

「桃香様、そこに行きたいのですか？」愛紗が訪ねてみる。

「コクン」言葉を言わずにうなずいた、気のせいかな少し桃香の様子が変な気がした

それからして、数十分後、桃香が来たかった所に来た、最初に見て思つた事

その一、土地が広く奥には城らしき建物があった

その二、少し賑やかだが、なんだか明るくない

「なんですかここは？」朱里が聞いてきた

「わからない、桃香が来たかった場所なんだろう」

「向こうから誰か来るぞ」星が向こうから来る誰かを見た。

人影が見えると、今までにぎわっていた人たちが静かになった。

「どどど、どうしたんですか？急に静かになっちゃって」

離里が怖くなって俺の背中に隠れた。

「大丈夫か離里？怖いなら隠れてろ」

「フフフフ、やっときてくれましたね、待ちくたびれましたよ」

何だこいつ、見かけからして俺より少し年上の男が部下を引き連れやってきた。

「何者だ？」愛紗が謎の男に問いかけた。

「鈴々、星、桃香を守つとけ」俺が小さな声で二人に言った。

「うむわかった」

「了解なのだ」

「朱里こっちにこい」

「あわわわ、はい」

とりあえず、朱里と離里を街の人に預けてきた。

「よしこれでいいだろう、でアンタ誰だ？」

男は部下に耳打ちをしていた、なにをたくらんでる……

第十一幕 旅（後書き）

どうも、今回は・・・特にありません
次回はなんとか、戦いを書こうと思います
では、

第十二幕 謎の男

「おい貴様？何をしている？」愛紗が男に近寄ろうとした時

「なっ？何をする？」愛紗は男の部下に腕を掴まれた。

「愛紗？てめえ・・・」

「おっと、あなたには一旦眠ってもらいますよ」

男が何やら呪文を唱え始めた。

「なっ・・・なにを・・・」そのまま俺は前に倒れた

「鬼龍？なにを寝ている？離せ？離さぬか？」

愛紗が言っているが、ダメだ意識が・・・

「淡島さん？起きて下さい？」

「う・・・ここは・・・」

「き、鬼龍さんが私たちを預けた人の家です」

朱里と離里が悲しそうにしながら、言った。

桃香達の姿が見えない、どこに行った？

「桃香達は、どこにいる？」

「桃香様達は……」

「ワシが答えよう」

すると奥から一人の爺さんが出てきた。

「お主たちが一緒にいた者たちは、この先にある城に連れて行かれる」とる

城？この先にあつたあれか……でもなぜ

「あの城に住んでいる彼奴の名は左慈、そして于吉と言う男が住んでいる

その者たちは突然現れ、村の女たちをほとんどを城に連れてゆきこき使っている。

もしはむかうな事をすれば、殺される」

「なんだ、そいつ強いのか」

「うむ、彼奴は呪文やさまざまな術を使って人を思い道理に動かせることができる」

思いど通りに・・・ん？じゃああの時、桃香を操っていたのか。

「で、桃香達はどうなる？」

「言う事を聞かない者は牢獄に入れられる、わしの妻もそこに連れて行かれたんじゃない」

そこで、頼む？お主らしいないんじゃない？妻を、おなご達を助けてくれ頼む？」

あいつら・・・何て事をしやがる・・・

そう思った俺は畏を体中にあふれ出し、怒りが頂点に達した。

「ああ、いいだろう助けてやる必ず」

「おお、ありがたや」

「朱里、離里おまえたちも来るか？桃香達を助けに」

二人はお互いの顔を見あって、

「「もちろん？」」

息のそろった返事で返してくる。

「じゃあ、早速いくぞ、左慈のいる城に」

そして俺たちは左慈のいる城の前に来た。

「朱里、離里お前たちは城に入った後牢獄を探して皆を助けるんだ途中まで一緒について行ってやるけど、後はお前たちの勇気を示す時だ」

「は、はい？頑張ります？」

よし、じゃあ行くか

そして俺は怒りを解き放って、

黒と赤が混ざった雷が空を埋め尽くし、

雷が体に直撃し、

武器、魔剣スパーダを手にして

畏を放ちながら、城の中に進んでいく

「待つとけよ、クソ野郎が」

第十二幕 謎の男（後書き）

いや、疲れました、今回はやっと覚醒状態になりました
次回は城に潜りこんだ鬼龍達は、牢獄を探すべく、城の中を調べる

第十三幕 探索

・星・

どこだ、ここは・・・

そこは薄暗い部屋、明かりが少し照っていた。

辺りを見ると、何人かの女性の姿があつた、さらに向こうから声が聞こえてきた。

「ふああああ、しかし左慈様も何を考えているのやら」

「そんな事知らねえよ、ここに来て街にいた女共を連れて来て何をするのか、しりたいねえ」

「おい？ここはどこだ？」

すかさず逃げようとしたが手と足がヒモで結ばれていて動けなかった。

「何だお前、もう起きたのか、ここがどこだか知りたいのか？」

右にいた男が言ってきた・・・ここにいるという事看守か・・・

「ここはだな、左慈様と于吉様つのが納めてんだよ、その二人はいろんな術を使えるんだよスゲエだろ」

じゃあ、あの時の男はこの城の主だったのか・・・

その前にここから抜け出して、愛紗達を見つけないと・・
(和人・・・お前はどこにいる・・)

・鬼龍・

「おらおらおら？殺されなかつたら道をあけるー？」

「なんだこいつ？早く討ち取らんか？はや・・」「じゃまだー？」ぎ
やあああ？」

なんかいたけど・・・気のせいかな。

「ま、待って下さい、早すぎますっ」

「淡島さん、待って下さい」

朱里と離里がハア、ハアと息をもらしながら頑張っ
て付いてきている。

頑張れ？朱里、離里もう少しだ(多分・・・)

「おっとなんと、さてここから桃香達を探すか？」

「ま、待つて下さい、す、少し休ませて……」

「そ、そうです……少し……休ませて……」

なんか疲れてるけど、そんなに早く走ったかな？

「とりあえず、ここからは二手に分かれて探すぞ」

「「はい」」

「ふう〜ここにもいないか」

あれから朱里と離里と別れて色々と部屋を探しているが見つからない。

あと、武器もスパイダから閻魔刀に変わっていた。
覚醒の効果が切れたらしい、まっいつか。

「この部屋は何だろう？」

恐る恐るドアをあけた、目に飛び込んだのは

「……………」

ボタン？…………気のせいだよな？

もう一度ドアを開けた。

「なんじゃ、一旦閉めおつて」

「なんであんたがいるんだ」

そこにいたのは、死んだ俺をこの世界に送り込んだ爺さんがいた。

「まったく、言葉づかいの悪い奴じゃな、年よりには優しくせんか」

「で、なんのようなんだ？」

「そうじゃったな、お主ここにおる女達を助けようとしとるようじやが

なぜたすけるのじゃ？」

「なぜって・・・助けるためだから」

「命に変えてもか？」

「え・・・まあ」

「うむ、ではお主にこれを授けよう」

そう言う爺さんが何やらブツブツ言っているがなんだ？

そして爺さんが「ハッ？」と言った瞬間腕が火に包まれて新たな籠手が腕に

くっついていた、これは・・・

「どうじゃ、おどろいたか？その籠手はイフリート、お主も知っておろつ。

さらに、フォースの力を入れておいたかのう、フォースはフォース

でも少し違う

工夫をしておいた」

イフリート・・・確かデビル1で が使っていた炎の籠手だったな

「このフォースは指定した人物を引きよせたり、吹き飛ばしたりできるんじゃない
あと普通に手を触れずに物を動かすこともできるんじゃない、どうじゃ
凄いじゃろ」

「ふゝん分かった」

「じゃあ、またのう」

新たにイフリートが手に入ったけど・・・まあ役に立たせてもらうよ
フォースの力も手に入った事だし。

「よし、探すか」

第十三幕 探索（後書き）

なんと今回は新たにイフリートとフォースを入れちゃいました？
ウヒョヒョ、スイマセン笑っちゃいました。

第十四幕 お知らせ

え〜どうも、bigboosです

今回は少し訂正したい所があります

第十三幕で鬼龍が最後の方に

イフリートの箆手とフォースの力が

手に入りしましたが、イフリートの箆手が

手に入った事をなしにしてください？

後から思っ たんですけど、「ベオウルフがあるから

べつにイフリートはいらねえじゃん」

と思いました、そして無茶なことにもう一つ

思いついたことが、（もうめんどくさいからイフリートの技

を、ベオウルフで出来るようにしよう）

と考えました、なのでベオウルフでデビルシリーズの箆手の技

をなんでもだせるようにします（無茶です）

フォースの力は使えるようにします

では、また

第十五幕 対決く前篇く

・朱里・

（うゝん淡島さんにあんな事言っちゃったけど
牢獄ってどこにあるんだろぅ・・・）

「朱里ちゃん、どっちにまがるの？」

「え、えつと・・・」

どっちに曲がろうか、間違えたらいけないし
うゝん、考えていると向こうの部屋から
声が聞こえてきた。

『それにしても暇だな』

『まあまあ、この部屋に薄青の髪美人
がいるんだぞ』

『まじか？それにしてもなんで捕まえるんだ？』

『さあな、知らねえよ』

薄青の髪・・・もしかして星さん！？
でも・・・ドアの前に居る人に気づかれずするには
どうしよう。

「ねえ、離里ちゃんどうしよう？」

「え、うゝん・・・あ！そくだ！朱里ちゃん耳貸して」

ひそひそ、なるほど！

『ん？なんだあのガキ』

『おい！なんのようだ、ここは立ち入り禁止だぞ』

「え、あ・・・その、中にいる人に食事をさせると言われまして・・・

」

「そ、そうです」

『そうか、なるべく早く済ませるんだぞ』

「は、はい」

離里ちゃんが言ったとおり、無事にはいれた。

離里ちゃんが言ったのは、顔を隠して牢獄にご飯を届けるようにしようということだったけど

こんなに簡単にはいれちゃった

「早く星さん達を助けないと」

「そくだね」

なにか声が聞こえてきた

『それにしても暇だな、おいどれか一人女で遊んどこうぜ』

『そうだな、どいつがいいかな・・・お、こいつでいいだろ』

『なんだ！なにをするんだ！離せ！』

『おいおい、暴れんなよ』

（あの声は星さん！どうしよう・・・）

考えていると淡島さんの言った言葉が浮かんた

「いいか、誰かを助けたいなら勇気をだして立ち迎え」

「勇気を持って・・・離里ちゃん！星さんを助けよう！」

「え、でもどうやって助けるの？！」

うゝん確かにどうやって、ん？あれは・・・

『へへへへ、少しはたのしませてくれよ』

『離せ！私に触れるな！』

『気の強い奴は嫌いじゃないぜ』

「せ～～のー！！」「」

『な、なんぎゃああああー！』

『うお！おい大丈夫か！誰だ出てこい！』

近くにあったたなを倒した衝撃で、ろうそくのひが消えてしまった。
そして星さんの近くに言つてなわをほどいた。

「星さん、大丈夫でしたか？」

「ああ、大丈夫だ。さあここから出ようつとその前に……」

星さんが木の棒を持って男の後ろに行った。

『ど、どこだ！』

「ここだ」

『な、後ろか！』

ガンー！！

そのまま木の棒で頭をたたいた。

「これでよし、中に居る他の人も一緒に逃げるぞ！」

なんとか皆を助けることに成功した。
淡島さん大丈夫かな……
そう思いながら私たちは走りだした。

一方鬼龍は・・・

「桃香っ！愛紗っ！鈴々っ！どこだっ！」

俺はその頃城の中を走りまわっていた。

第十五幕 対決〜前篇〜（後書き）

どうも、完成しましたどうぞ

第十六幕 対決〜後編〜

・鬼龍・

「ハアハア、まったく無駄にデカイなこの城」

その頃俺は城の中をいまだ探していた。

「お、この部屋はなんだ？」

扉に耳を近づけ中の声を聞いた、なにやら声が聞こえてきた。

『左慈、どうするんですか？この者たちを』

『ふふふふ、あの男がくるまで生け捕りにしておくですよ』

『このなわをほどこしてください！お願いします！』

『鈴々達を離すのだー！』

『離せ！早くなわをほどけ！』

『あなた達にはまだここに居てもらいますよ』

あの声！桃香達の声だ！それに左慈ってやつもいるのか・・・
よし、このドアを蹴り破ろう。

・・・・3

・・・・2

・・・1

GO!!

助走をつけてドアに向かって走り出した。

「うおおおおお!!」

『ん? なんだ声が・・・』

「せいやあああ!!」

『ぐほお!!』

「な、なんですか!」

そのままドアの近くにいた兵をドアと一緒に蹴り飛ばした。

「やっと見つけたぞ、クソ野郎が!」

「鬼龍さん!」

「クククク、来ましたか待ちくたびれましたよ」

周りには、五人ほどの兵が並んでいた。

そして、左慈の近くには桃香達がいた、手首と足をヒモで結ばれていて

動けなくなっていた。

「桃香、愛紗、鈴々大丈夫か？」

「はい！」

「ああ、大丈夫だ」

「鈴々も大丈夫なのだ！」

三人とも大丈夫そうだな、さて・・・あいつをどうするかな

「とりあえず、桃香達を返してもらっぜ」

俺は手を前に出してフォースの力で桃香達を引きよせた。

「「「きゃあ!!」」」

「おっと、大丈夫か？」

俺はこっちに引きよせられてきた桃香達を受け止めた。

「は、はい」

「あ、ああ」

「おどろいたのだ」

「な、なんだその技は・・・」

左慈が向こうで驚いていた、まあそうだな。

「お前たちは星達と一緒にここから逃げろ」

「で、でも」

桃香がこっちを向きながら悲しそうにして言ってきた。

「大丈夫だって」

「大丈夫なのか・・・あいつかなり手ごわいぞ」

「ああ・・・わかってる、ほら行け！」

そう言い残して桃香達を助けた。

「さあ、この前の飯は返してもらっぜ」

俺はベオウルフを装備し、周りに青い円が出来ていた

(なんだこれ・・・もしかして)

そして俺は魔人になった。

「これが魔人の姿か、んじゃいくぞ！」

周りにいた兵たちが行く手をふさいだ

『左慈様達に近寄らせるな!』

「じゃまだ――!!」

そのまま敵兵を薙ぎ払い左慈の居る所まで走った。

「無駄なことを・・・于吉！」

「愚かな者よ、食らうがいい!!」

もう一人の方が何やら呪文を唱え、壁を作った。

「フッフ私が作りだした壁はだれにも壊され「ふん!」なっ!」

なんか言ったかな? そんな事を気にせずに壁(?)を壊して左慈に拳の一振りを食らわせた。

「ぐっ・・・!!」

浅かったか、なら次は!

トリックアップを使って于吉の真上に行った。

「くたばれええーーーー!!」

「な、そんなこの私がこんなところで・・・ぎゃあああ!」

そのまま流星脚で于吉の体うを貫いた。

「あとは・・・お前だけだ・・・」

帰り血を浴びながら、俺は左慈にゆっくり近づく・・・なんにも畏れることなく

「く、くるな！私を怒らせるとどうなる知っているのか！」

「んなもん、しるか！」

その時、魔人からいきなりスパードに変わった、なんだろう？
ちようどいいや、これであいつを殺す。

「ならば、私の術を食らうがいいー！」

そう言つと、なにやら赤い球を投げてきた。

シュウウウ~~~~・・・

「な、なぜだ！これをくらって生きたやつはいなにのに！」

なんか腹のあたりが暖かい、もう少し温度を下げてくれればいいの
に。

「もう終わりか・・・お前は民を苦しめ、虐殺してきた
あの世に行ったら、それを後悔するんだな！」

そのまま魔剣スパードで体を真っ二つに切り裂いた、
声も上げずにそのまま倒れた。

「ふぅ、疲れた」

第十六幕 対決〜後編〜（後書き）

どうも、お久振りです（自分では）

今回やっと終わりました、長かったです。

次回からはなるべく恋姫のようにしていきたいと思います、ではまた

第十七幕　まさかの・・・

・鬼龍・

「いや、本当にありがとうございました、
このお礼は忘れません」

「いやいや、そんな・・・」

あの後、無事に街の女達は解放されて俺たちは
祝福を受けた。

「この街を良い街にしていきたいと思います」

「はい、頑張ってくださいね」

「桃香様、鬼龍殿、そろそろいきますぞ」

星が遠くから声をかけた、星はなぜかあの時いらい
おれを鬼龍殿と呼ぶようになった、理由はしらん。

「ああ！今行く！」

「行かれてしまうのですか・・・」

そこにはあの爺さんがいた。

「はい、まだまだ助けを求めてる人達が居ますから、それに
ここはもうあなた達で大丈夫ですよ」

桃香が微笑んで言った。

「鬼龍殿、有難うございました起きお付けて」

「どうも、じゃ」

（二時間後）

通りかかった街であるものを見つけた。

「なんだあれ？」

「何でしょうか？」

「えっと、『私の名は袁紹！勇気あるものは反董卓連合に参加し、共に戦おう！』だそうです」

星が木に書かれてあった事を言ってくれた、

確か本では反董卓連合と董卓が戦うだったよな。

「どうするのですか？桃香様、参加なさいますか？」

愛紗がそばによって桃香に聞いた。

「そ、それはもちろん戦いたくないけど・・・」

俺も桃香の発言に一票。なぜかって？決まってるじゃないか
面倒だから、以上！

「あつちにもありますよ」

朱里が向こうにあるもう一個の方を指差した
皆はもう一個の方に向かった。

「えっと『天の遣い子、自分のことを神の子と言い
魏の曹操の配下になったり！』です」

「ん？天の遣い子？なんだそれ」

「えっと確か、鬼龍殿がここに来る前にもう一人別の世界
から来たと言う男が来たのです。そのものの名は北郷 一刀、
まさか魏の配下になるとは・・・」

北郷 一刀・・・どつかで聞いたことがあるな、うゝん
・・・思い出せん。

「そいつの特徴は？」

「えっと、確か胸のあたりに『聖』と書いたものがあつた気がしま
す」

離里が答えてくれた、胸に『聖』と書いたもの・・・

・・・え？まさか・・・

「なあ！そいつの髪型知ってるか！なんでもいい！とにかく知ってる事全て話してくれ！」

俺は離里の肩をもって揺さぶった。

「お、おしえますから、あんまり揺らさないでくさい！」

「あ、す、すまんつい・・・」

「いえ、いいんでしゅよ、まだ目がククラクラするですう」

大丈夫じゃねえじゃん！

「オホン、では離里に代わって私が説明します」

愛紗が代わりに話してくれるそうだ

「確か、髪の色は黒、それにかなりの剣術を持っていると聞いたことが・・・」

「間違いない、思い出したぞ！」

「何がですか？」

「その北郷 一刀ってやつは俺がいた学園の生徒の一人で俺の友人なんだよ」

「「「「「え、えええええ！？」」「」「」

「そ、それは本当ですか！？」

「え、ああ・・・そうだけど」

「本当に！、本当なんだな！？」

皆が一斉に聞いてくる、俺は聖徳太子じゃないんだぞ！

「まてまて一旦落ちつけ！ちゃんと説明するから！」

それから移動して俺は皆に説明した。

第十七幕　まさかの・・・（後書き）

どうも、いやゝさむくなってきました。
今回も長くなりました。

次回は過去編をやりたいと思います。

第十八幕 鬼龍の過去へ前編へ

鬼龍がまだ向こうの世界で生きていた時の話……

「おーい、鬼龍」

「なんだ一刀、用でもあるのか？」

その日俺は一刀と一緒に学園から家に帰る途中だった。

「明日お前暇か？」

「明日ね……まあ暇だけど、何かあんのか？」

「いや明日良ければ剣道してみねえかなと思ったから」

「剣道か……」

俺は別にいいけど面倒だしな……どうするかな……

「お前剣道した事あるだろ？」

「ああ、昔に何回かやった事があるけど」

「じゃあいいじゃねえか」

「うーんどうしようか……まっいつか」

「いいぜ、でいつやるんだ？」

「それはまた明日言うから」

「ん、了解じゃあな」

そこで俺と一刀は別れた。そして俺は家に帰った。

「ふう、今日も疲れたな、さてなにをするかな・・・
そういえばまだクリアしてないゲームがあつたな」

それから一時間・・・

「はあ、やっとできた、肩が凝つたな」

ブーーーー、ブーーーーー

おつ携帯がなってる、えつと誰からだ
ん？一刀から、何だ？

「はい、もしもし」

『よお和人』

「なんだ一刀用か？用が無いんだら切るぞ」

『話を聞けよ・・・それより剣道の事だけど
」

それから十分間一刀と話をした。

『 と言つ事だから』

「おう、分かったじゃあな」

く次の日く

いつもと変わらない風景、いいことだ。

「よう一刀」

「よう和人、元気か？」

「昨日電話したばかりだろ・・・」

いつもどつりの学園。

「そつえば和人」

「ん？なんだ」

「剣道の事だけど今日でもいいか？」

「ああいいけどなんで急に？」

「早くやった方がいいじゃん」

「分かった、今日の放課後でいいな」

「おう」

（放課後）

「なんだあいつ、言っときなが来ないじゃねえか」

先に俺はきたけどあいつどこで油売ってた。

そう思っていると向こうから一刀の姿が見えた。

『おい和人遅くなってすま痛ってええええええ！何すんだよ！？』

「なにのんききてんだよ、ああん？」

「すまんってちょっと用事があったてな、そんなことより始めようぜ」

「はいはい」

そしてそのあと、少ししてから帰ろうとしていた。

「お前強いな」

「お前の攻撃が一直線すぎるんだよ」

「なに、お前だってワンパターンじゃねえか！！」

「お前のほうがよっぽど下手じゃねえか！！」

「なんだと！」

「やんのか！」

「・・・・・・・・」

「フフ、アハハハハ！」

その笑い声が剣道の部屋一面に響いた。

「じゃあな」

「ああ、また明日」

その言葉が俺と一刀の最後の言葉だった・・・

第十八幕 鬼龍の過去〜前編〜（後書き）

こんばんわ、今回は過去編ということで鬼龍の過去を書いていきます
設定では一刀と親友とかは書いていませんが、楽しんでください

第十九幕 鬼龍の過去／後編／

そして次の日・・・

その日俺は珍しく寝坊をしてしまった。

「やべー！間に合うか？！」

学園まであと数キロ、ここは近道を使うか。

「ほっ、ほっ、ほっとよしこのまま行けば」

なんとか学園に着いたものの、さすがに家から学園まで走ってきたから

さすがに疲れたな、どこか座る場所は・・・あそこがあいてるな。

「よっこい・・・おい！何してんだ！」この声・・・一刀か」

俺は一刀の音がする方に走っていた、でもさすがにさっき走ってきたばっかだから
足がへとへとだ。

「ん？ここはたしか歴史資料館だったな『くっ・・・！離せ！』
誰が離すか！」

おい！一刀どうし『うわあああ！！』な、なんだ！？」

そのとき大きな光が突然出て、一刀ともう一人の男はそこに居なかった。

「あれ？一刀？おいどこだ」

よんでも返事がなかった。

「おい嘘だろ・・・一刀！どこだ！」

ガツン！

ん？なんか今蹴った気がしたが・・・

「何だこれ？鏡・・・？」

そこのは割れていた古い鏡が落ちていた。

「まさかこれに吸いこまれたんじゃ・・・なわけないよな」

そのまま俺は教室に戻った。

「あれ？一刀がない、なんだ」

俺と一刀は同じクラスだが、そこには一刀の姿が無かった
おまけに一刀の机もない・・・

（なんだ、どうなってんだ?!）

「いや、その連合軍に参加するのじゃないのか」

「えっと・・・それは・・・」

「桃香様、我々義姉妹はどこまでも付いてゆきます」

「鈴々もついて行くのだ〜!」

愛紗と鈴々は桃香について行くと言った。

「私たちもついてゆきますぞ」

星、朱里、離里も桃香について行くと決めた

「皆・・・ありがとう・・・」

「で、どうするんだ」

「決めました、私は民を、人々を救うため連合軍に参加します!」

そして俺たちは反董卓連合軍に入ることにした。

（一刀もそこに来るんだろうか・・・）

第二十幕 反董卓連合軍

・桃香・

（あんな事言っちゃたけど・・・大丈夫かな・・・）

私たちはあの後、街を出て反董卓連合軍の軍議が行われる場所に向かっていた。

「ん、どうした桃香？不安そうな顔して」

「え、あ、いやなんでもないです・・・」

言えない。今更不安になったなんて・・・

「桃香様、少し休みましょう」

「え、あうん、そうだねもう暗いしね」

愛紗ちゃんが寝心地の良い所を探してくれた

「鬼龍殿、いつ女の姿になったのですか？」

「え？ああさっき向こうの草むらで女になったけど」

「桃香様、どうかしましたか？」

「ううん、何でもないよ」

「鈴々ちゃん、食べてすぐに寝ると牛になりますよ」

「鈴々は牛なんかになったりしないのだ」

「朱里ちゃんの言うとおりですよ」

そんな話を話しているとすっかり辺りは暗くなっていた

「zzz・・・」

「すっく・・・」

「皆寝ちゃいましたね」

「ああ、そうだな」

私と鬼龍さん以外は皆寝ている。

でも、まだ・・・不安が詰まってる・・・

「どうした？不安な事でもあるのか？」

「え！？そんなことないよ！」

言いたくても、言えない・・・

「・・・戦いのことが・・・？」

「え！」

「隠すことはないさ、誰でも戦いは好きでやってるんじゃない
そうだろう？」

確かに鬼龍さんの言うとうりだ、私も好きでやってるんじゃない。
人々を・・・皆を守りたいために・・・

「鬼龍さんは怖くないんですか？」

「ん？俺か？当然怖いさ、戦いなんてしたことないからな」

「そうなんですか？鬼龍さんのいた所ではなかったんですか？」

「うーん、俺がいたころはなかったけど、産まれる前の時代は戦い
があった」

鬼龍さんのいた時代が羨ましくなってきた・・・

「だが今からする戦いも多くの死者が出てくる、けどそれを無くす
のが

お前の目指している平和だろう？」

「それじゃあどうして鬼龍さんは、私たちに力を貸してくれるんですか？！」

「どうしてって・・・そりゃあこのまま見殺しにするわけないだろ」

「どうして戦うですか?!」

「・・・申し訳ないが俺には平和がどう言う事が分からない、だから平和を感じた事もない」

「え?じゃあ・・・なぜ」

「話はここまでだ・・・早く寝ろ」

「桃香、そろそろ着くが、覚悟はいいか?」

「は、はい!」

「大丈夫ですよ、私たちがいますから」

その後私たちは朝早く出発してようやく軍議のある場所に着いた。

・鬼龍・

俺は・・・一刀にどう言えばいいんだろうか。

「まあ、あつてから話すか」

バサ・・・こんなに人がいるのか・・・

そこには十数人の将がいた。

「あなたはどなたですか？」

一人の女武将が俺たちに聞いてきた。

「私たちは連合軍の参加見てきたんですけど・・・」

「そうなのですか！自己紹介がまだでしたわね
私の名は袁紹、字は本初ですわ以後お見知りおきお」

「はじめまして、私の名は劉備、字は玄德と言います
こっちは私の義姉妹の関羽と張飛と言います」

『あの者たちが黄巾の乱で活躍した・・・』

なんだ桃香達活躍したのか？

「あら、劉備さんじゃない」

声をかけてきたのは背が低く、髪が青い女が居た。

「ああ！曹操さん！げんきでしたか？！」

あいつが曹操か・・・その後ろには二人の背が高い女ともう一人は男がいた。

・・・ん？男？

「曹操さん、後ろの三人は？」

「ああ、私の従姉妹よ、右から夏侯淵、夏侯惇、そして一刀よ」

「その通り、俺が”天の遣い”と言われている北郷一刀だ」

「そっちの人達は？」

「あ、えつと右から、趙雲さん、鳳統ちゃん、諸葛亮ちゃんそして鬼龍さんです」

「ん？鬼龍？」

「どうしたの一刀？」

「いや、おいそこの鬼龍とカ言っ奴」

ん？誰かが俺の名前をよんだか？
周りを見渡すと一人の男が指差していた。

「なんだ？」

「お前名前は？」

「鬼龍和人だが、それがどうした？」

「いや、何でもない」

向こうはきずいているのか、気づいてないのか。
ま俺は気づいているんだけどな。

「おほん、話を戻してよろしくて？」

「え、はい」

「ええ」

そのあと、袁紹の説明を聞き、解散となった。

第二十幕 反董卓連合軍（後書き）

今回、長く書きましたがどうでしたか？
これからもおもしろく、楽しくしていきます。
ではまた

第二十一幕 再会（前書き）

今思ったら孫堅が出てない気がした・・・

原作では出てたっけ？誰か分かる人がいたら感想に書いてくださいお願いします。

第二十一幕 再会

・鬼龍・

軍議の後、俺たちは一つの部屋を借りて、戦いに備えての話し合いをしていた。

「　　と言う事です、何か質問がありますか？」

愛紗が董卓軍の戦況を説明した。

「では、これで説明を終わります」

説明を終えた後、俺は少し外に出て散歩をしていた。

「鬼龍殿」

「お、星かなんだ？」

「少し私の手合わせを願いたいのですが・・・よろしいですか？」

「ああ、いいぜ」

「では、いざ！」

星が槍を構えて俺に向かって突き出した。

「そんなんじゃないぞ、もっと相手の動きを読みあらかじめ

備える」

一瞬星の動きが止まったのを見て、閻魔刀を素早く構えアッパースラッシュで星の槍を空中に飛ばした。

「なっ・・・!？」

「はい、終了」

「まだまだ敵いませんな、まだ強くなければ・・・」

「俺が教えてやろうか？」

「いいのですか？」

「ああ、まず槍を構えて突いてみる」

「分かりました」

そう言うと星の槍は素早く前に突き出した。流石だ、でももっと早くなるな・・・

「星、槍貸してみ」

「ん？はい」

「星は槍が出すのは早いが、もう少し工夫したらもっと早く出来るぞ」

「どのようにすればいいのですか？」

「槍を出すのと同時に足を前に突き出してみろ、こんなふう……に！」

ヒュン――！

ヒュン――！ヒュン――！

「お、おお！凄いですな」

「これでやってみろ、上手くなるから」

「ありがとうございます」

『あの……すいません』

一人の兵が俺に話しかけてきた。

「ん？何か用か？」

『自分たちにも教えてくれませんか？』

うーん、どうしようか……

『俺が教えてやるさ』

俺が考えていると横から声がした。

「おう、頼むわ」

「まかしとけておい！本当に頼むのかよ！」

「だってお前が教えてやるって言ったんだから、しっかりやれよ」

「おい！冗談だったの！『お願いします！一刀どの！』まじかよ．．
」

少しは俺も樂をしたいからな。

『おいどこだ！』

誰だよ、ゆっくり寝ている俺の邪魔をしている奴は．．．

「おわ！こんなところに居たのか」

「なんだ、一刀殿」

「お前、鬼龍和人だろ？」

「それがどうした」

やっと気づいたかな．．

「俺だよ！北郷 一刀だよ！」

「アナタダレデスカ、ワタシアナタシラナイ．．．」

「お前ふざけてんのか・・・、そんなことよりなんでここに居るんだ？」

「ああ、お前が突然いなくなつたろ？」

「ああ」

「そのあとお前の家に行こうとしたときに、車にひかれて死んで、ここに
来たんだよ」

「そうだったのか・・・そして何て服装してるんだ」

「ん？ああこれは、あの世に行った時、神がなんでも願いをかなえてやるって言ったから」

「まあそれはいいとして・・・俺の仲間にならないか」

「・・・・・・は？」

「お前と俺だったら、ハーレムも出来るぞ！」

「・・・・・・ハーレム・・・・・・」

「どうだ？魏に入らないか？」

こいつ・・・・こっちに來てなんか変わったな・・・

「断る・・・・」

「なっ・・・!!どうして!?!」

「おまえ・・・こっちに来て変わったな」

そう言い残すと俺は、帰って行った。

(ま、いずれ・・・)

第二十一幕 再会（後書き）

「一刀と親友だったんかい！」と思う人がいると思いますが
まあ、優しく見守っていてください

第二十二幕 悩み

・華琳・

「あの和人とか言う人・・・何者かしら・・・」

「一刀殿は何やら知ってそうでしたが・・・」

（それにしても・・・キレイだったわ・・・）

「今度一刀殿に聞いてみましょうか？」

「いや、私から聞いてみるわ」

「分かりました」

それと・・・気になる事もあるしね・・・フフフフ・・・

・鬼龍・

ゾクッ！

「なんだ今の寒気・・・」

それにしても・・・広すぎて迷いそうだ・・・

・・・迷っちゃった。

「ん？ここは・・・」

俺の目の前に一つのテントがあった。

「入ってみるか・・・（バサッ）」

おお、ひろいな、辺りを見渡すと壁に”呉”と書いた旗を見つけた。

（呉？までよ・・・ヤバイ！ここは・・・）

『誰だ！？そこに居るのは！？』

しまった！どうする！

1、逃げる

2、謝る

3、事情を話す

どうする俺！？

『ん？お前は・・・』

絶対絶明のピンチ！

『お前が鬼龍か？』

「え・・・どうして俺の名前を」

『軍議の中に居たる・・・私たちは』

その中にはピンクの髪を二つに束ねている女がいた。

「もしかして、孫堅？」

『貴様！孫堅様に向かってその口はなんだ！』

『やめろ、祭構わない』

『しかし・・・？！分かりました・・・』

なにやら凄かったな・・・

「その通り、私が孫堅だ、字は文台お前は・・・」

「俺は鬼龍、字は和人、一刀とは昔からの友人だ」

「なに！まさか本当とは・・・」

「私は黄蓋、字は公覆だ、それにしてもお前女か？」

なにやら、物騒になりそうだな。ここは・・・

「さいなら~~~~~！（ダッ）」

「あ、こら！待て〜！」

「ハア、ハア、さすがにここまでくればいいだろ」

そうしていると辺りが暗くなってきた。
そろそろ戻るかな・・

「ただい・・・何してんだ・・・」

そこには、星以外は・・これは遊びか？

「何やってんだ・・星」

「おお鬼龍殿、見てのとおりですぞ」

「いやこれは遊びじゃないだろ、どう見ても」

なにをしているのかと言うと、あれだ・・えっと

「見ての通り、貝合わせですぞ」

「いや、貝合わせって同じ貝を見つけるんだろ」

「こら鈴々!・・・そこは・・」

「きゃあ!鈴々ちゃん!胸は触っちゃ嫌ですよ」

「愛紗姉ちゃんと桃香姉ちゃんは胸が大きくて羨ましいのだ・・・」

「す、凄いですう・・・」

「やっぱり、二人共すごいです」

はあ、何してんだか。あれ？星？

「フッフ私も混ぜてもらおおかな」

「こら！星まで！やめろ！」

お前まで何やってんだーーーー！！

「何やってんだーーーー！お前らーーーー！」

「ま、まさか鬼龍殿がいるとは・・・／／／／」

「恥ずかしいよ／／／／」

「まあいいから、明日から戦いがあるからな。早く寝るんだぞ」

うーん、寝付けない。

コンコン・・・

「あの、鬼龍さん・・・ちょっといいですか？」

朱里か・・・「ああ、いいぞ」

「失礼します・・・」

朱里の後ろには離里が着いて来ていた。

「どうした、寝れないのか？」

「あ、あの一緒に寝てもいいですか・・・」

「え、まあ構わんが・・・」

そのまま朱里と離里は俺を真ん中にして両脇に入り込んだ。

「「「・・・」」」

「気まずい、何をすれば・・・」

「あの・・・少しいいですか？」

離里が訪ねてきた。「何だ？」

「鬼龍さんは、その・・・怖くないんですか」

「？何がだ？」

「いえ、なんでも・・・」

「そう言えば、朱里と離里は戦いにでるのか？」

「私たちは、その・・・」

「まあいい、出るか出ないかは聞かないよ」

それにしても二人共まだ幼い感じがするな・・・
日中なんの本を読んでんだ？

「なあ」

「はい？」

「朱里と離里は日中何の本をよんでんだ？」

「／／／えつと・・・その・・・／／／」

なにか秘密にしたいのだろうか。まあいいけど。

「さ、もう寝るぞ」

「・・・はい」

俺はこのまま、ここで生涯をすごすのだろうか・・・

第二十二幕 悩み（後書き）

こんにちは。もう2011年も終わりそうですね。
これからも寒くなってくるでしょう（たぶん・・）
これからも恋姫無双〜龍の如く〜をよろしく
では

第二十三幕 兵糧庫奪還

・鬼龍・

「いいですね、ではこれより董卓軍討伐をはじめます！
皆さん頼みましたよ！」

「」「御意！！」「」

「私たちはこれから孫堅さんと一緒に、董卓軍の拠点を目指します」
桃香がそう告げると馬に乗った女が一人大軍を率いて、こっちにや
つてきた。

「劉備、行くわよ」

「はい！じゃあ皆！平和のために！」

『うおおおー！ー！』

そのまま俺たちは孫堅とともに、董卓のいる拠点に向かった。

「はあ〜〜・・・」

「どうしたのですか鬼龍殿？」

星は隣によって言った。

「いや、戦いが面倒になってきたから・・・ただそれだけ」

「なにを言っているのですか、鬼龍殿は男（？）なのですから戦場に出て、活躍しないと」

男が活躍する所か？ここは

「分かったって、それに俺は・・・」

「俺は？」

あれ、何言いたいんだったつけ？

そうしていると拠点の近くまで来ていた。

『孫堅殿』

「ん？どうした」

一人の兵が孫堅に耳うちをした。なんだろう？

「なんだと！ほんとうか！？」

『はい、それと向かっている拠点には鬼神呂布がいます・・・』

「くっ・・・！袁術め・・・！」

「どうしてんですか？」

「ああ、さつきここに来る途中、袁術に補給を頼んでいたのだが補給を回さないと
先ほど連絡してきた」

「え！それじゃあ食料とかはどうするのですか！？」

「私にもわからん！」

補給が来ないと言う事は、食料も来ないってことか。それじゃあ長期戦だったらこつちが
不利じゃないか！何か手は・・・

「あの孫堅殿」

「なんだ」

愛紗が孫堅になにか聞いた。

「この近くには敵の兵糧庫はないのですか？」

兵糧庫？食べ物を保管している所か・・・

「確かここから南西に二キロの場所にあるが」

「私が兵糧庫を奪ってきましょう」

「なに！それは本当か！」

「愛紗ちゃん危ないよ！」

「大丈夫です桃香様」

愛紗が兵糧庫を奪うと言っているが、大丈夫なのか？

「それでは何人が部下を・・・」

「いや私一人で十分です」

「な・・・っ！何を言っている！一人で行くなど、命を捨てるのと同じことだぞ！」

ふあゝ寝む・・・するとチョンチョンと誰かが俺の裾を引っ張った。

「なんだ星？」

星が裾を引っ張っていた。何だ？

「鬼龍殿が行けばよいのでは？」

「なんで俺が・・・」

「鬼龍殿は私たちよりも遙に強いのですから」

ただそれを理由に・・・

「はあ、分かったよ」

俺は孫堅に近寄り

「俺が愛紗と一緒に兵糧庫を奪ってくる」

「え！良いのですか鬼龍殿？」

「ああ、手伝ってやるよ」

その言葉を言い残すと俺と愛紗は馬にまたがり、兵糧庫を目指した。

「それでは兵糧庫のことは鬼龍達に任せて、私たちも急ぐわよ」

そのまま俺と愛紗を残してほかの人達は拠点を目指して向かった。

（死ぬなよ・・・）

そしてようやく俺と愛紗は兵糧庫の前に来た。

「覚悟はいいですね？」

「いつでもいいぜ」

俺は閻魔刀を抜き構えた。

「いくぞ愛紗！」

「はい！」

『敵集——！敵集——！』

中に入った途端、敵の兵が鐘を鳴らした。

「愛紗！構わず斬れ！」

『二人だけで何ができるって言うんだあ？』

たしかに無謀だが・・・俺に会ったお前らは運が悪いな！

（殺す・・・斬る・・・）

？なんだ、今は・・・

「鬼龍殿！」

ハッ！前を見ると兵が俺に向かって剣を振ってきた。

「残念・・・」

俺は素手で相手の攻撃をはじいた。そうパージルの力を持っている俺は

パージル同様、素手で攻撃を防ぐ。

「フンッ！」

そのまま空中に浮かんだ十人の兵をまとめて、空中連斬で斬り裂いた。

『ぎゃ・・・』

声もあげずにそのまま体が二つに分かれた。

「さあ来い！」

「鬼龍殿……」

『ぎゃああああ！』

そのまま敵を斬っているといつの間にやら体の周りに赤黒いオーラが出ていた。

「もう終わりか……あっけない」

ヒュン！グサ！

「矢……そこか……」

『ひいひい！来るな——悪魔！』

「鬼龍殿！もうよい！」

「何言っている愛紗、一人残らず殺す……」

『許してくれ——！ぎゃああああ！』

クククク楽しい……人を殺すのが……

「き、鬼龍……殿……？」

「クククク……ハハハハハハ！」

そのまま俺は兵糧を壊そうとした。その途端後ろから愛紗が抱きついてきた。

「鬼龍殿・・・もう良い・・・良いのだ・・・」

愛紗が泣きながら俺を力強く抱きしめた。

「愛・・・紗・・・」

「さっきはすまなかった」

「／／／い、いえそれより大丈夫ですか？／／／／」

愛紗が照れながら言った。

「ああ、大丈夫だそれより早く桃香のところに行こう」

「はい！」

さっきの声は何だんだ・・・

第二十四幕 呂布

・桃香・

（愛紗ちゃんたち、大丈夫かな・・・）

「劉備、付いたぞ」

そうしていると敵の拠点の前についていた。

「ここにはあの鬼神呂布がいる。用心しろ！」

『はっ』

孫堅さんが言うにはこの拠点には鬼神呂布がいるという。

「桃香殿、大丈夫ですか？」

「うん大丈夫だよ」

「これより敵の拠点叩く！あの拠点には呂布がいるので、注意しつつ進め！」

『はっ！』

「行くぞー！」

『おおおーーーーー!!』

「私たちも頑張ろう!」

『うおおおーーーーー!!』

そして敵にめがけて突撃した。
向こうからも敵の大軍がきて、激しくぶつかった。

「いけーひるむなー!」

「私たちも遅れをとるなー!」

『うおおおーーーーー!!』

その時一人の武将が出てきた。

「邪魔するなら・・・消す・・・」

『報告!呂布が現れました!』

一人の兵のほうくを聞いて私たちは啞然とした。

「誰か止められぬ者はおらぬのか!?!」

「私が行きます」

「星ちゃん?!だめだよ!」

「鬼龍殿と愛紗が活躍しているのに、わたしだけ助かるのは気分が悪いのです」

「でも・・・」

わたしはなんとか説得しようとしたが、なかなか聞いてくれずついには鈴々ちゃんまでも言いだしました。

「じゃあ一つ約束ね、必ず生きて帰ってきてね」あいつが・・・

・鬼龍・

俺と愛紗は兵糧庫を奪った後、急いで桃香達のいる場所まで戻っていた。

「桃香様は大丈夫でしょうか・・・」

「桃香達なら大丈夫だろ星と鈴々が着いているからな」

「そうですよね」

そうするとひとりの兵がこっちに来た。良く見ると負傷している。

「どうした！何があった！」

『りよ・・・呂布が・・・』

呂布・・・鬼神と言われているあいつか。

「とにかく、傷を治さないと」

愛紗がいそいで馬に乗せようとする。何かないかなとさがすとビンがあつた。

（これは、確か何でも治せる薬）

「おい！これを飲め」

『何ですかそれは・・・』

「いいから飲め」

兵に飲ませると傷が見る見るうちに治った。

『おお、傷が』

「愛紗お前は兵を本陣に連れて行け俺は呂布の所に行ってみる」

そう言い残すと俺は馬にまたがり呂布のいるところに向かった

そこで俺が見たのは、一人の女が槍を振るって、見方bを薙ぎ払っていた。

「呂布・・・」

第二十四幕 呂布（後書き）

作：こんばんわ、もうすぐ年が明けてしまします。

さて、今回は報告があります。恋姫無双は一旦連載を止めようと思
います

理由はあまりないですが・

鬼：なんでやめるんだよ！このまま続けろよ！

作：他の小説を書いていたら、書いている小説が早く
終わりそうだったから・

鬼：じゃあ宣言しろ

作：何を？

鬼：遅れてでもいいから、必ず復活して続きを書くこと

お！

作：・・・分かった宣言しよう。皆さん！またどこかで合うかもし
れません

しかし！必ず他の小説を書き終わったら！必ず復活します！

大変勝手ですが、どうかお分かりただけなら辛いです。

では、また！どこかで会いましょう。

（ちなみに書いている他の小説は、バカと奇跡の召喚獣です
興味があるひとは読んでください！お願いします！）

さようなら・・・またどこかで会いましょう・・・

第二十五幕 復活

作：どうも、こんにちは。
そして復活しました！

鬼：早いな！

作：いやーあの後少し熱が出てね、暇だったから小説をどうしようか迷ったんだよ。

鬼：どうしようかとは？

作：今二つ書いてるんだけど、二つを一緒に書くか、一つだけにしようか

悩んだんだよ、そして出た答えが、二つ一緒に書くってことにしたんじゃ

鬼：いいじゃねえかそれで。まあ二つもかくと疲れるけどな。

作：はは、何を言っているんだ君は俺が君みたいにちんたらちんたらしてる

・・・わけないよね！その刀をしまつて、俺を殺す気か！

鬼：大丈夫だ・・・存分に傷みつけてやるから・・・

作：その笑顔は冗談には見えないけど！？

鬼：でもかけるんだからいいじゃねえか、それで。

作：そうだな、じゃあ頑張るカ、年が明けるのも近いし。

鬼：そうだな終わるまで付き合ってやるよ。クズ

作：おお、頼んだぞ。アホ

鬼：ああ！？何だところ！

作：おお！やるつてのか！

鬼&作：こいつ！殺す！

作：では今後とも恋姫無双〰龍の如く〰をよろしくお願いします。

鬼：う．．．っ（死亡）

第二十五幕 復活（後書き）

みなさんどうでしたか、「早!」と思う方もいるかもしれません。
今後ともよろしくお願いします。

第二十六幕 鬼神VS鬼龍

「あれが・・・呂布・・・」

そこには槍をもったひとりの女が味方を薙ぎ払っていた。
その姿はまさに鬼神と言えるべきだった・・・

「こりゃあ・・・どうしようか・・・」

すると二人の女が呂布に向かった。
その二人はどこか見覚えがある姿だった。

「呂布！覚悟！」

一人の女が呂布に向かって突っ込んだ。

（何やってんだあいつ！死ぬ気か！？）

そう思っているともう一人突っ込んでいった。

「鈴々が相手なのだー！」

（鈴々！？なんであいつが、それにもう一人は星じゃねえか！）

俺は急いで向かった。

「はあ、はあ何て奴だ・・・」

「鈴々もつかれたのだ・・・」

「これで・・・終わり・・・（ヒュン！）」

「く・・・っ！」

ギン！

「ふう〜ギリギリだったな」

俺は間一髪のところでは呂布の攻撃を閻魔刀で防いだ。

「「鬼龍殿！」」

「よう大丈夫だったか？」

「なんとか・・・」

「大丈夫なのだ〜」

そのまま俺は呂布ごと後ろに飛ばした。

「誰・・・？」

「俺は鬼龍お前鬼神の呂布だな」

「どうして名前を・・・？」

「そんなことはどうでもいいさ、勝負しろ一騎打ちだ」

「わたしも戦いま・・・ぐっ！」

星も戦うとしたが傷を負っていた。

「お前は一度戻って傷を治してもらえ」

「しかし・・・！」

「いいから」

「分かりました・・・」

「それから向こうに行ったら愛紗に薬をもらえ」

「分かりました」

星と鈴々は一旦戻って行った。

「これで邪魔するものはなくなった」

俺は閻魔刀を腰に当てて構えた。

「行くぞ！」

「・・・（スッ）」

俺は呂布向かって走り出した。呂布も俺めがけて走りだした。

「フン！」

俺は閻魔刀を神速の早さで抜き出し、呂布に向かって斬りつけた。

「・・・・・・！」

呂布は何とか俺の攻撃を防いだ。

「やるな、流石鬼神」

「そつちこそ・・・」

「そりゃどうも」

俺と呂布は後ろに下がった。

「魔人化・・・」

そして俺はパールと同じ魔人になった。

「いいのを見せてやろう・・・幻影剣！」

そして俺は幻影剣を自分の周りに設置した。

「幻影剣・・・？」

「そうだ、そしてこの姿が魔人、悪魔だ・・・」

「悪魔・・・」

「そしてお前は今日ここで終わる・・・」

俺は呂布の周りに幻影剣を設置した。

「・・・・・・・・！」

「心配するな、終わると言っても死ぬわけじゃない」

ふう、と息を吐いて・・

「・・・・・・・・刺せ・・・・・・・・」

その言葉と同時に幻影剣は呂布の足、腕に刺さった。

「がっ・・・・・・・・」

第二十六幕 鬼神VS鬼龍（後書き）

どうも、前の幕で伝えた通り復活しました。
今は別の小説も書いているので、興味があつたら読んでください。
では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641y/>

恋姫無双～龍の如く～

2011年12月27日19時54分発行